

異端への厳しい態度

ヨハネの手紙Ⅱ―13節

この教えを携えずにあなたがたのところに来る者は、家に入れてはなりません。挨拶してもなりません。そのような者に挨拶する人は、その悪い行いを共にすることになります。(10、11)

ヨハネがこの第二の手紙を書いたのは、教会の中に「グノーシス主義」という異端思想が入り込み、キリスト者を正しい福音から引き離そうとしていたからです。彼らは霊は善で、肉(物質)は悪であるという二元論的な哲学思想を持ち込み、救い主が肉体をとって人間となられたことを否定しました。これは神が人となられたというキリスト教信仰の根幹を否定するものでした。ヨハネはこのような異端者たちに対して、キリスト者が厳しい態度で望むように勧めます。愛を欠いた言葉のようにも思えますが、本物の愛は、「不正を喜ばず、真理を共に喜ぶ」(第一コリント一三六)ものです。真理をねじ曲げる異端に対しては、教会はきっぱりと「ノー」と言わなければなりません。多くの異端が働きかけている中で、間違った教えに惑わされることなく、正しい福音を伝えていきたいものです。